

「初夢アート描き初め大会—ミュージアムと地域社会—」

2010年1月11日 埼玉県立近代美術館 講堂

第1部「さまざまな夢を描く」／第2部「多様なロードマップの接点を探る」

ゲストコメンテーター: 加藤種男(アサヒビール社会環境推進部副理事、アサヒビール芸術文化財団事務局長)

熊倉純子(東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授)

佐藤時啓(美術家、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授)

趣旨

〈SMFアート楽座〉は、SMFのこれまでの活動や昨年11月に開催した〈ラウンドテーブル〉をふまえて、アート関係者相互の交流を図り、情報共有・研究・連携・発信を促進する場として設けられました。ミュージアムを暫定的なプラットフォームとして、さまざまなエネルギーを持った方々が気軽に集い、ゆるやかにかつ機動的につながること、さまざまな協働のゆりかごとなり、そのような活動の蓄積を通して芸術と社会を結ぶ「アートな縁側」として機能することをめざしています。開設を記念する第1回〈アート楽座〉は、芸術と社会を結ぶ最前線で活躍中の3人のゲストを迎え、アーティストや美術館関係者、さまざまなアート関係者を中心に計65名が参加して、車座集会的なシンポジウムとして開催されました。新春にちなんで「初夢アート描き初め大会」と題して、描き初めやSMFの活動の紹介展示、「自力更生車+a計画」アーティストお手製の万華鏡や竹とんぼ等の飛び入り紹介も含めて、和やかな雰囲気で行いました。

第1部 報告

第1部では、埼玉県内を拠点にユニークで意欲的な活動を展開している5組の団体・個人から

事例発表をいただきました。「まちアートプロジェクト」とともに近年「越谷ニューウェイブ」ともいうべき動きの中心となっている《KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)》の浅見俊哉さんからは「アートとは具体的な行動である」、「伝えることまで含めて作品である」として、KAPLを拠点にダイナミックに展開されている実験的な試みの数々が紹介されました。《キタミン・ラボ舎》の新井慶太さんからは、2008年の「北本アーツキャンプ」を機縁に設立された同舎の歩みと、アートを通して地域との関係創出をめざすさまざまな活動が報告されました。両者の成り立ちや方向性は異なりますが、いずれも若い世代が中心となった注目すべき動向です。彫刻家の高岡典男さんからは、各国でのさまざまな彫刻シンポジウムの経験をふまえて、芸術活動の本質的な重要性、芸術を仲立ちとして人々が交流し楽しむ場の重要性が改めて提起されました。《ヒアシンスハウスの会》の佐野哲史さんからは、詩人・建築家の立原道造の構想が別所沼の畔に没後65年を経て実現されたヒアシンスハウスの成り立ちと立原の「芸術家コロニー」の夢を重ねた同会の活動が紹介されました。《SMF運営委員会》の丹下尤子さんからは、美術家・根岸和弘さんの監修により多くの方々の協力のもとに各地で展開された風車のインスタレーションを中心に、昨年度の「LINK!ミュージアムか

らアートの風を!!」から今年度の「SMFアートのわっ!」に至るSMFの事業の展開が報告されました。アートの種を蒔き、さまざまな協働を生み出すそれぞれに魅力的な活動報告でした。しかし昨今のアーティストやギャラリー、美術館の置かれた厳しい状況に端的に示されるように、そのような活動を支える社会的基盤はきわめて脆弱です。会場からも、活動資金や活動基盤についての切実な質問が出ていました。地域や経済と芸術文化を結んで、それぞれが自立的な活動を継続するためのさまざまな工夫を凝らすとともに、アート関係者と市民が課題を共有して新たな基盤整備につながる、さまざまな試行や提案を行っていくことが求められています。「アートの力」を活用して自分たちのヴィジョンをみんなで作っていくことができれば、ピンチをチャンスに変えることも充分可能だということ。会場からの発言には拍手が沸き起こりました。(中村誠／埼玉県立近代美術館・SMF事務局)

第2部 ゲストコメンテーターのコメント抄録

【加藤種男さん】私たちは今、経済の仕組みについて「コンパクト経済」というものを提唱しています。大型店舗が席卷して商店街が疲弊している、それを変え大量生産・大量消費だけではない経

済を組み込もうという提案で、製造・販売を一体化するのがひとつの原則です。自分のところで作って売るという製販合一の考えは「地産地消」とも結びつく。顧客管理の面からも消費者の顔が見え、また消費者側が生産者側を再統合することにもつながります。この経済はきわめて小規模で、生産性・効率性が低い。しかし、こうしたことはアート活動にもびったり当てはまるのではないかと。一般のアート活動はひとつひとつ手づくりで非生産的・非効率的です。しかし、それが私たちの生きがいを生み出す。私たちは長い間、そうした経済のあり方で生活してきたはずで、もう一度アートを呼び戻して、「コンパクト経済」を組み込んだ経済システムを打ちたてる必要があると思います。また美術館のような既存文化施設の改革を進めたいと思っています。その意味で、「ひらかれた美術館」というテーマに沿ったSMFの活動はとても貴重であり、堤防に蟻が穴をあけるような、そうしたいろいろな回路を美術館に導入してほしいと願っています。

【熊倉純子さん】ある調査では、ITゲームコンテンツ系のクリエイターたちは、権威ある美術大学が輩出するのではなく、どこから生まれてくるかわからないといひます。先ほど発表された地域に根ざしたアートプロジェクトもまた、一定の活動の規模を継続していく大変さの一方で、さりげなく

身軽な中にも無意識に戦略的にやっているのかもしれない。世の中に貢献したい、つながりたいというそのシンプルな意識はうらやましく思います。マーケットをつくる上では美術館やギャラリーは必要でしょうが、それとは異なり、美術作品が日常生活の周りのどこにでもあって、作家と話したり、気が向いたら買ったりするような社会にならないかと私は思っています。アーティストもキャリア志向をするのではなく、コーディネーターとして地域の人たちともっと交流してほしい。また美術館も市民にアートセンターとして使われることで、いろいろな交流や活動を展開する要役になってほしい。今日のシンポジウムには、これからのコミュニティの可能性やいい感じの内輪感があって、ようやく新しい美術館のかたちができつつあるのを感じます。それは私が永年、夢見てきたものです。

【佐藤時啓さん】僕自身はアーティストなので、その立場からお話します。はじめはアトリエで制作していましたが、たまたま写真を作品にすることでまちへ出ていき、まちの面白さをどのように人に気づいてもらうかということに興味をもち、いろいろな活動をしています。アートには、学校の図工・美術の時間に習い覚えてきた造形性だけではなく、人と人とのネットワークをつくる可能性があり

ます。また先ほどの発表のように、商店街の方々がネットワークでつながっていることに気づくという側面もあります。最近、アートが街とリンクしてワークショップなどをする理由のひとつが、そこにあるでしょう。しかながら、その点で日本はまだまだ貧しい状況にあるのも事実です。この社会はアーティストという属性をなかなか認めてくれない。学校の卒業後に、アルバイトをしながら地道に新しいアイディアや創造性を見出そうとする人々を、日本では「フリーター」、もっと悪ければ「ニート」と言う。ですから、海外に活動の場を求める人も多いのです。同じように貧乏でも、外国ではアーティストは尊敬されます。美術館や社会が若いアーティストを育て、そしてアーティストがそこに還元していけるような世の中になったらうれしいな、と思います。

(文責:高橋博夫／SMF運営委員)

回顧:〈SMFアート楽座〉離陸

〈ラウンドテーブル〉が顔見世興業だったとすれば、この〈アート楽座〉がSMF座の本公演。今回の第一回目の離陸記念公演は、3人のゲスト・コメンテーターをお招きして、これから展開していくSMFの活動のイメージをあたためる機会となりました。第一部の活動報告に感心し、幕間のパフォーマンスに心とみつ、現在はピンチなのか、チャンスなのかと新たな悩みも覚えたものの、第二部のゲストのコメントにおおいに励まされて、我々にも何かできるかもしれないという気になりました。ただ、いったいどこまで飛べるのか、着地のイメージはバラバラなのかもしれません。ある場所に向かって正確に着地しようとするより、それぞれのイメージでホバリングしながら低空飛行を共有し、地形を読んでいくようなフライトシミュレーションこそ有効なのではないでしょうか。そしてまた、美術館の中での議論を越え、具体的な手がかりとしての言葉や表現者、場所、時間に向き合うような飛行計画をスケッチできた時に、現代という風がとらえられるようにも思うのです。

(青山恭之／SMF運営委員)

